

落書きの心理学的分析

小 山 充 道

Abstract

The graffiti is a psychological act that is close to being instinctive in human beings. In this paper, we analyzed graffiti from nine viewpoints. The subjects comprised 84 undergraduate women enrolled in Childcare courses. All had shown a long-term interest in infants and handicapped children, and had many opportunities to see pictures drawn by children. Subjects were asked to respond to the following nine questions: "When do you draw graffiti?," "Where do you draw graffiti?," "What equipment do you use when you scribble?," "What graffiti do you draw?," "What feelings do you have when drawing graffiti?," "What meaning does the graffiti have for you?," "What meaning does the graffiti have?," "When did you start drawing graffiti?," and "Do you think that there are any differences in the graffiti drawn by children and that by adults?"

As a result, we found the following. Subjects tended to draw graffiti simply when the spirit moved them, or when they had time. Graffiti was drawn in the blank spaces of a notebook or on any paper at hand. The subjects usually used a mechanical pencil or pencil to draw graffiti. Many subjects drew pictures of cartoon characters and animals, human faces and so on. The purpose of the graffiti was to kill time or to encourage a change of pace. A majority of subjects responded that they drew graffiti most frequently as a high school student. This was followed in order of frequency by junior high school student, elementary school student, undergraduate and finally infant. After puberty, the use of notebooks increased and there was an increase in subjects who described their motive in drawing graffiti as a diversion.

キーワード: 落書き、カテゴリ分析、心理学的意味

1. はじめに

“落書き (graffiti)” は身近にあって、少し気にはなるが見過ごされやすいもののひとつである。Reisner (1977) はその理由として「それは筆者が特定されにくいために、歴史家、哲学者、社会学者、心理学者、精神科医、行動科学者等がまともな考慮をはらわない活動だから」と述べている。落書きをタイトルにした書物は現在でもほとんどみあたらないが、Reisner が著した『落書き — 壁画の 2000 年』は落書きの心理学的意味を探るのには好著である。Reisner によれば、トイレの落書きを意味論で分析した最初の書物は、Allen Reed 博

士が著した『落書きに見る英語語彙上の証拠』である。本書は 1927 年に着手され、1933 年にパリで自費出版された。着想が評価され、Reed は後にコロンビア大学教授となった。一方 Reisner 自身は、大学で教科目として「落書き学」を教えた最初の人物となったという。

李家 (1952) によれば、当時日本の高校や大学の便所には受験悲劇の苦悶や他愛もない詩歌、性器描画の落書きが氾濫していたという。旧制姫路高校では、卒業記念に自校の便所の落書きを採取して出版した」ともいう。ある新聞が第 1 高等学校での落書きを取り上げ紹介したことに端を発し、相当に世の反響を呼んだという。落書きは決して

無視できない人間の心のメッセージと考えてよい。

古代イタリアの洞窟壁画に記された描画を描いた人は、描画を見る人に何を伝えようとしたのかといった分析やトイレの落書きの意味論等、落書きの心理学的および社会学的特性を研究テーマとしてとりあげた研究は散見されるが、描者の心理臨床的視点から迫る研究は残念ながら今日に至ってもほとんどみあたらない。Academic OneFileで“graffiti, psychology”と入力し検索すると、Bailey, J. (2008) の心理学に対する社会からの誤解に関する落書き、つまり雑文が1件示されるに過ぎない。臨床心理学の視点からの落書き研究の歴史は未開拓といってもよい。

ところで“落書き”という言葉の定義も、歴史的背景の違い等により異なる。松枝 (1991) によれば、“落書き”を意味する用語としては日本語では「落書 (らくしょ)」があり、英語では graffiti, scribbling, doodling があるという。日本における落書きの歴史を問題にする際によく引用される建武の新政を風刺した『建武年間記』にある「二条河原落書」は建武元 (1334) 年 8 月、鴨川の二条河原 (中京区二条大橋附近) に掲示されたといわれ、長歌の形式をとるので落首ともいえる。前年に成立した建武政権の混乱ぶりや不安定な世相を、たとえば「落ち度があれば必ず損してしまうので、上司にゴマをする」など風刺をたっぷりとこめて書いているところに特徴がある (京都市資料 2006; 笠松ら 1994)。江戸時代に入ると落書作成者は武士だけでなく、町民や農民にまで及び増加した。吉原 (1999) は「時事または人物について風刺・嘲弄の意を表した匿名の文書」と落書を定義し、水野忠邦の天保の改革に対する批判が込められた「海角 (改革) と云悪獣の図」を転載している。絵入りの落書には「馬鹿物」という馬が手に金貨と武士・百姓・町人をつかみ、腰には御用金の袋をつけ舌を出している様子が描かれている。政治が生活を悪化させている状況を庶民は認識していたと考えられている。

一方、英語の graffiti という用語は映画「アメリカングラフィティ」というタイトルに使用されている。車とセックスとロックンロールに青春のエネルギーを発散させる、1962 年のアメリカ地方都市に生きる若者たちの生態を描く青春映画であり、青春時代の甘苦いエピソードが落書き (グラフィティ) のように綴られる。アメリカン・ヘリテイ

ジ英英辞典によれば、graffiti は公道上や、建造物・公衆トイレの壁などへの描画または文字を意味し、古代のイタリア洞窟壁画をあらわす考古学用語として 19 世紀に現れた。doodling は夢中で目的もなく落書きすることまたは暇つぶしを意味するが、今日カメラで撮影した写真に落書きする位ずら書き (Doodling) というソフトもある。プリクラのようにカメラで撮影した写真にフレームを合成し、いろいろな落書きができる。落書きには通常ペン、アニマルペン、レインボーペン、スタンプ、飾り文字が使い、半透明にすることもできる。また動画 YouTube では、退屈な授業中の暇つぶしに使えるような数学的落書き紹介動画 “Doodling in Math Class” を見ることもできる。

一方、scribbling は心理療法では「なぐり描き」という意味で使われ、心理臨床には馴染みが深い用語である。小山 (2008) によれば、なぐり描きはもともと子どもの遊びの一種であり、幼い子は皆これを楽しむ。2 歳までの子どもは言葉よりも「感覚」と「運動」で外界を認識することが知られている。ピアジェはこの時期を感覚運動期と呼んだ。発達心理学者 Gardner, H. (1980) によれば、この時期に見られるなぐり描きは「手先や手首や前腕の筋肉活動を記録した印」であり、子どもにとっては「ひとつの達成の現れ」といえる。子どもはなぐり描きをすることで感覚運動を楽しんでいるともいえるが、2 歳頃のなぐり描きは「ただの本能行動あるいはでたらめな活動以上のもの」だとの印象をガードナーも強くもっている。なぐり描きに対する心理療法的なまなごしは、Naumburg, M. (1966) のスクリブル法 (scribble) に由来する。なぐり描きを用いた心理療法は「遊戯療法」に近い。さらに 1971 年、小児科医である Winnicott, D. W. は交互スクイグル法 (Squiggle) を心理治療場面に導入し、なぐり描き研究の礎を築いた。交互スクイグル法では相手が描いたでたらめな描線に治療者が何かを見立て、ふたりで何かを創り上げていき、そのプロセスで生じる「何か」を大切にす。本法は双方がお互いに無理なく相手にほどよく関わる相互関与性の良い機会を与えてくれる。しかし一方では治療場面におけるクライアントに対するセラピストが適切な応答をすることが求められる。治療者の臨床眼および言語能力、伝達能力が必要とされる描画法でもある。時を経て平成の現代になると、落書きを契機と

した事件が多発する。一例をあげよう。佐賀県の公立中学校の女子トイレの壁に、6つの相合傘にイニシャルのような文字や「LOVE」の文字等が彫るように刻まれていた。学校側は「誰が落書きをやったのかを把握しないと指導ができない」と考え、あらゆる手を尽くして一人の女子を特定した。その直後、女子は校舎2階の窓を乗り越え、転落して怪我をしたという（朝日新聞、2009.9.27付）。落書きは異性に対する思いが伝わる内容で何ら他者を中傷するものではないが、公共物に落書きをするという行為が問題となった。また電車への落書き事件に関与した国際集団を器物損壊等の容疑で追送検したとの記事もある（朝日新聞、2008.11.29付）。「落書き」には、当該落書きに対する価値観、つまり道徳的行為の観点からの良い悪いで示されるその落書きに対する外部評価と、落書きをする本人の心性とが微妙に絡まり、落書きの意味を読み解くのは容易なことではない。

心理学的視点では、スクリブル法以外の落書きについての臨床心理学的研究はほとんどみあたらない。臨床心理学的視点では、落書きは「匿名性を保持」したまま、「描く（または書く）動機、場所、内容、方法、道具はさまざま」だということを踏まえたうえで、本人を落書きに至らせる心性に関する何かしらの共通性を探る努力が重要となる。本論文はこの努力の一環として位置づく。

以上の経過から、本論文では落書きを臨床心理学的視点から「描者の匿名性を保持しながら、ある思いをめぐらせ、気になることにふれ、感情的な背景を感じながら、隠された自分の心性に迫る行為」と定義する。本論文では、現代の教育場面における大学生の落書きについて、どんなときに落書きをするのか、どこに落書きをするか、落書きをするときはどんな気分になるかなど、さまざまな角度から落書き時の行動について分析し、可能な限りの範囲内で、落書きの本質つまり落書きに隠された心性について考察する。

2 方法

1) 対象

保育学科在籍中の女子大学生84名が対象となった。対象者は日頃から乳幼児や障害児に対する関心が深く、子どもの描画と馴染みのある学生生活を送っている。落書きの調査対象としては、

好適と考えられた。

2) 質問表と質問の意味

以下は対象者に求めた「落書きについての質問」の一覧である。質問は9つある。質問内容と質問内容の意図について付記する。右側は対面で実施するときの文言であり、対象者から尋ねられたときの言葉使いである。

- ①どんなときに「落書き」しますか？ →落書きする『とき』はいつ？＝『いつ落書きをするの？』
- ②どこに「落書き」しますか？ →落書きする『場所』はどこ？＝『どこに落書きをするの？』
- ③落書きするときには、どのような道具を使いますか？ →落書きする『道具』は何？＝『落書きするのに何を使うの？』
- ④あなたの落書きは、どんな落書きが多いですか？ →『どのような』落書きをするの？
- ⑤落書きをしているときは、どんな気分ですか？ →落書きをしているときは『どんな気分？』
- ⑥落書きをしたあとは、どんな気分になりますか？ →落書きを終えたとき『どんな気分になった？』
- ⑦落書きとは、あなたにとってどのような意味を持ちますか？ →落書きの『意味』
- ⑧振り返ると、あなたが落書きをよくしたのは、いつごろでしたか？ →落書きの『自己体験』
- ⑨子どもが描く落書きと、大人が描く落書きには違いがあると思いますか？ あるとすれば、どのような違いがあると思いますか？ →『落書きの生涯発達の視点～加齢による落書き内容についての意味の相違』→「子どもの落書きと大人の落書きとは違いがあると思いますか？」

以上、9つの視点から落書きを分析する。

3 結果

問1から9まで、順次分析結果を以下に記す。

1) 問1の分析結果

問1の「落書きをするときはいつ？」の結果に対するテキスト分析にあたっては、たとえば「ひまなとき」や「授業中」といったキーワードを含

む用語の抽出を軸に行った。なお「ひまなとき」の表現方法は、「暇な時」「ひまな時」「ヒマな時」などいろいろあったが、すべて「ひまなとき」で表現した。

テキスト分析には PASW Text Analytics for Surveys 3.04（以下、PASW と略す）を用いた。PASW を用いた分析結果、以下の 7 つのカテゴリが抽出された。「ひまなとき」「授業中」「気が向いたとき」「電話中」「考えごとをしているとき」「書く道具が目に入ったとき」「落書きはしない」であり、出現率は図 1 に示すとおりである。カテゴリ化結果に対して、グリッドレイアウトを施したものを図 2 に示した。各ノード（点）はカテゴリを表し、ノードの大きさは、選択されたカテゴリのレコード数に基づいた相対的な大きさを表している。2 つのカテゴリ間の線の太さは、これらが共有するレコードの数を表している。その結果、「ひまなとき（77.4%）」を基軸として、次に「授業中（22.6%の重複率；以下同様）」、そして「気が向いたとき（13.1%）」、次に「電話中（6%）」と「考え事をしているとき（3.6%）」が、そして 1 名であるが、「書く道具が目に入ったとき」に落書きをするときと答えた。

以上の結果、「ひま」の意味を探る必要性があることと、「授業中」や「電話中」のどんなときに落書きをするのかについての検討の必要性、「気が向いたとき」の「気」とは何か、どのような「考え事をしているとき」にどのような落書きをするのか、「書く道具が目に入ったとき」にどうして落書きをしたくなるのかなどについての検討が求められる。

2) 問 2 の分析結果

問 2 は落書きをする場所に関する質問である。PASW を用いた分析結果、以下の 10 個のカテゴリが得られた。

「ノート」「余白」「配布プリント」「紙」「手帳」「手」「机の上」「消しゴム」「雑紙」「その場にあるもの何にでも」「無回答」であった。カテゴリの重複出現率は図 3 に示すとおりである。

図 3 によると、キーワードの「ノート」と「余白」で 80%以上、「配布プリント」でおよそ 30%となっている。また各 1 名であるが、「雑誌」「消しゴム」「手」にも落書きしている。これらの結果から、落書きには、直近に利用できる用具を使っ

ているのがわかる。行き当たりばったりの状況で落書きは展開し、そこには計画性は見られない。図 3 のデータに基づくグリッドレイアウト結果を図 4 に示した。それによると、落書きにはまず何でも書き込める「ノート」が必要であり、そのノートには「余白」があることが重要となる。「配布プリント」は、講義中に偶然得た「ノート」の一種と考えられるし、必要に応じて開いた「手帳」には「余白」がある。視線を机の上に落とすと、何だか文字を書きたくなる。それはやってはいけない行為だと認識されると自分の「手」に落書きをしたり、「消しゴム」にもボールペン等を使って何かを書き込む。落書きに至るまでの心性はほとんど無意識的といってもよい。

3) 問 3 の分析結果

問 3 は落書きをする道具に関する質問である。PASW を用いた分析結果、以下の 7 つのカテゴリが抽出された。「シャープペンシル」「鉛筆」「ボールペン」「身近にある筆記用具」「色鉛筆」「クレヨン」であり、出現率は図 5 に示すとおりである。なお「無回答」は 2 名であった。図 6 は落書きに使う用具に対するカテゴリ化結果に基づくグリッドレイアウトである。その結果、最も利用する用具は「シャープペンシル」であり、およそ 75%を占めている。次に「鉛筆」が 20%、「ボールペン」が 12%ほど、色鉛筆は 6%で、「クレヨン」と答えたのは 1 名であった。これにより、「シャープペンシル」「鉛筆」「ボールペン」は落書きの用具としてはありふれた道具であることがわかる。一方、「色鉛筆」や「クレヨン」を落書きに利用するのは稀だということがわかる。

4) 問 4 の分析結果

問 4 では、どのような落書きをするのか、つまり落書きの種類をたずねた。その結果、「キャラクター」「絵」「動物」「文字や線」「顔」「そのときに考えていること」「人物画」「シュール」「日付」「目の前にあることを同じように描く」「てきとう」「部活関係」「友達と一緒にする落書き」の 13 個のカテゴリが得られた。無回答は 2 名だった。詳細は図 7 に示した。その結果、「キャラクター」「絵」「動物」「文字や線」の 4 種で 25~34%を占め、「顔」が 11%、その次は「そのときに考えていること」が 8%程度、人物画が 2%程度、「シュール」「日

付」「友達と一緒にする落書き」「部活関係」「目の前にあることを同じように描く」「てきとう」との答えは各1名であった。人間との関連で見れば、「顔」や「人物画」は2～11%程度であり、落書きとしてはまれといってもよい。図8は落書きの種類の結果をグリッドレイアウトで示したものである。その結果、「キャラクター」「絵」「動物」「文字や線」の4種が四隅の点となり、直方体を構成しているのがわかる。この4種のうち、とりわけ「キャラクター」と「動物」、「絵」と「文字や線」の関係が深いことが読み取れる。

5) 問5の分析結果

問5は落書きをしているときの気分を尋ねる設問である。落書きをしているときどんな気分なのかは、そのときどきにする落書きが、描き手にとって楽しいものなのか、あるいはそうでないものかを知るきっかけとなる。その結果、「楽しい」「リラックス」「無心」「夢中」「退屈」「普通」の6個のカテゴリが得られた。無回答は2名だった。詳細は図9に示した。「楽しい」「リラックス」「無心」「夢中」で、落書きをしているときの気分のほとんどを占めているのがわかる。この結果からは、落書きが心地よいものであることがわかる。

その結果、「楽しい」と「リラックス」「無心」間の結びつきが強いことがわかる。この4種のうち、とりわけ「楽しい」と「リラックス」の関係が深いことが読み取れる。図10に落書きをしているときの気分のグリッドレイアウトを示した。

6) 問6の分析結果

問6は落書きを終えたとき『どんな気分になる』かについて尋ねた。分析結果、「楽しい」「達成感」「変わらない」「穏やか」「スッキリ」「罪悪感」「満足」「無心」の8つのカテゴリが得られた。「無回答」は4名であった。図11はその詳細を示している。この図から、「楽しい」「達成感」「変わらない」「穏やか」「スッキリ」「満足」といった肯定的な反応が大多数を占めることがわかった。一方で、描いた落書きに罪悪感を抱く人が8名いた。図12に落書きを終えたあとの気分に関するグリッドレイアウトを示した。図12の結果から、「楽しい」と同時に、「穏やか」「達成感」を味わった人が多かったことがわかる。

7) 問7の分析結果

問7では落書きの『意味』について問うた。落書きは描き手にとってどのような心理学的意味をもっているのだろうか？ 分析結果、「暇つぶし」「特に意味なし」「気分転換」「気晴らし」「備忘録」「気持ちの整理」「眠気覚まし」「遊び」「単なるお絵かき」「趣味」の10種のカテゴリが得られた。「無回答」は4名だった。その結果、「暇つぶし」がおおよそ60%、「気分転換」「気晴らし」「気持ちの整理」という心理療法的効果を意識している人が17名(全体の20%)いた。「特に意味なし」が13%ほどいたが、この応答も重要である。本論文では、心理臨床的に『「意味がない」という意味を感じ取っている」と把握する。図13にカテゴリの詳細を示した。図14に落書きの意味に関するカテゴリのグリッドレイアウトを示した。

8) 問8の分析結果

問8は落書きをよくした時期を尋ねる質問である。落書きをよくしたのはいつごろだったか？ 分析結果、「高校生」「中学生」「小学生」「大学生」「幼稚園児」の順番で落書き体験が多いことがわかった(図15)。よく考えてみるまでもなく「高校生」「中学生」は思春期真っ只中である。実は落書き行為は、心身のバランスを崩しがちな思春期を支えるひとつの心のツール(道具)となっているのかもしれない。

次に多いのが「小学生」と「大学生」である。両者は年齢が離れ、心理的には子どもと大人という違いがある。これについては問9で検討を深める。図15において、「幼稚園」時代の落書き体験が最も少なかったのは驚きではない。応答者は大学生であり、幼稚園時代のお絵かきはたくさんしたがあまり自発的なものではなかったと認識したのかもしれない。あるいは時間が過ぎて、落書きしたことを忘却したのかもしれない。

図16に落書き体験時期の関連を示した。図16から、高校生時代と中学生時代が中軸となり、この2つのカテゴリが大学生時代、幼稚園児時代と結びついていること、「小学生時代」との重複は少なかったことが読み取れる。

9) 問9の分析結果

問9は子どもが行う落書きと、大人が行う落書きには違いがあるかどうか、個人的な感じ方を問

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
ひまなとき	<div></div>	77.4	65	77.4
授業中	<div></div>	22.6	19	22.6
気が向いたとき	<div></div>	13.1	11	13.1
電話中	<div></div>	8.0	5	8.0
考えごとをしているとき	<div></div>	3.6	3	3.6
落書きはしない	<div></div>	2.4	2	2.4
書く道具が目に入ったとき	<div></div>	1.2	1	1.2

図1 「落書きをするときはどんなとき？」に対する応答のカテゴリ化

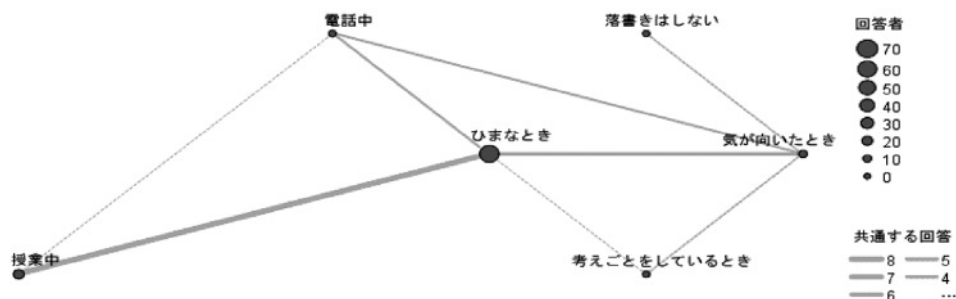


図2 「落書きをするとき」のカテゴリ化結果に基づくグリッドレイアウト

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
ノート	<div></div>	85.7	72	85.7
余白	<div></div>	81.0	68	81.0
配布プリント	<div></div>	29.8	25	29.8
紙	<div></div>	19.0	16	19.0
机の上	<div></div>	6.0	5	6.0
手帳	<div></div>	4.8	4	4.8
無回答	<div></div>	2.4	2	2.4
その場にあるもの...	<div></div>	1.2	1	1.2
雑紙	<div></div>	1.2	1	1.2
消しゴム	<div></div>	1.2	1	1.2
手	<div></div>	1.2	1	1.2

図3 「どこに落書きをするのか」に対する応答のカテゴリ化

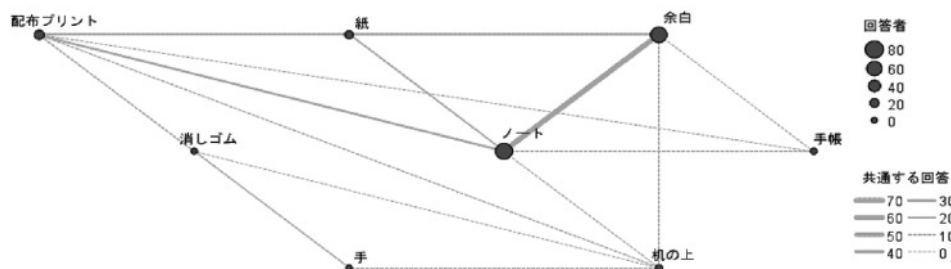


図4 「どこに落書きをするのか」に対するカテゴリ化結果のグリッドレイアウト

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
シャープペンシル	<div></div>	73.8	62	73.8
鉛筆	<div></div>	20.2	17	20.2
身近にある筆記用具	<div></div>	13.1	11	13.1
ボールペン	<div></div>	11.9	10	11.9
色鉛筆	<div></div>	6.0	5	6.0
無回答	<div></div>	2.4	2	2.4
クレヨン	<div></div>	1.2	1	1.2

図5 「落書きに使う用具」のカテゴリ化

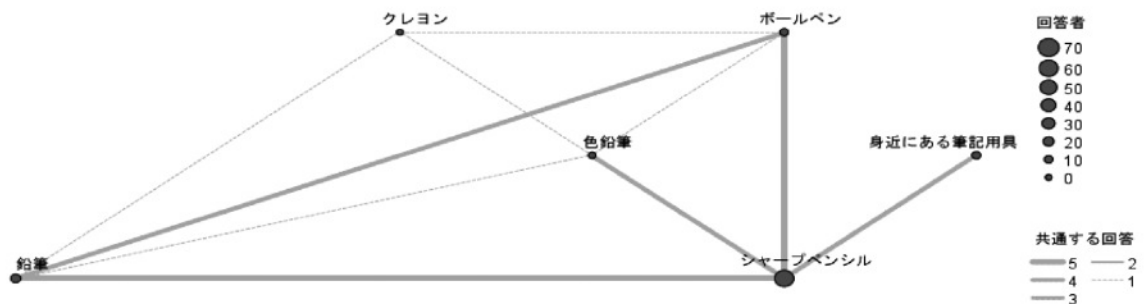


図6 落書きに使う用具に対するカテゴリ化結果をグリッドレイアウトで示したもの

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
キャラクター	<div></div>	33.3	28	33.3
絵	<div></div>	32.1	27	32.1
動物	<div></div>	28.2	22	28.2
文字や線	<div></div>	25.0	21	25.0
顔	<div></div>	10.7	9	10.7
そのときに考えていること	<div></div>	8.3	7	8.3
無回答	<div></div>	2.4	2	2.4
人物画	<div></div>	2.4	2	2.4
シュール	<div></div>	1.2	1	1.2
日付	<div></div>	1.2	1	1.2
友達と一緒にする落書き	<div></div>	1.2	1	1.2
部活関係	<div></div>	1.2	1	1.2
目の前にあることを同じように描く	<div></div>	1.2	1	1.2
てきとう	<div></div>	1.2	1	1.2

図7 「落書きの内容」のカテゴリ化

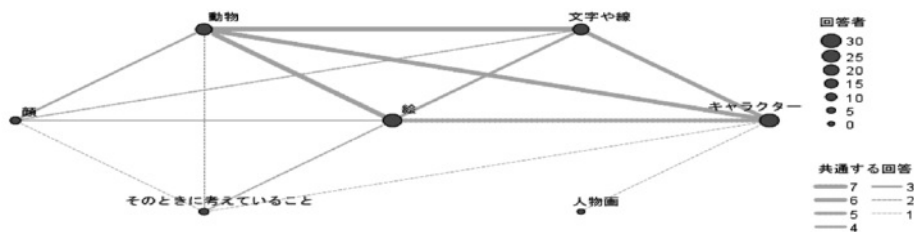


図8 落書きの種類のグリッドレイアウト

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
楽しい	<div></div>	54.8	48	54.8
リラックス	<div></div>	34.5	29	34.5
無心	<div></div>	28.6	24	28.6
夢中	<div></div>	11.9	10	11.9
退屈	<div></div>	2.4	2	2.4
普通	<div></div>	2.4	2	2.4
無回答	<div></div>	2.4	2	2.4

図9 「落書きをしているときの気分」のカテゴリ化

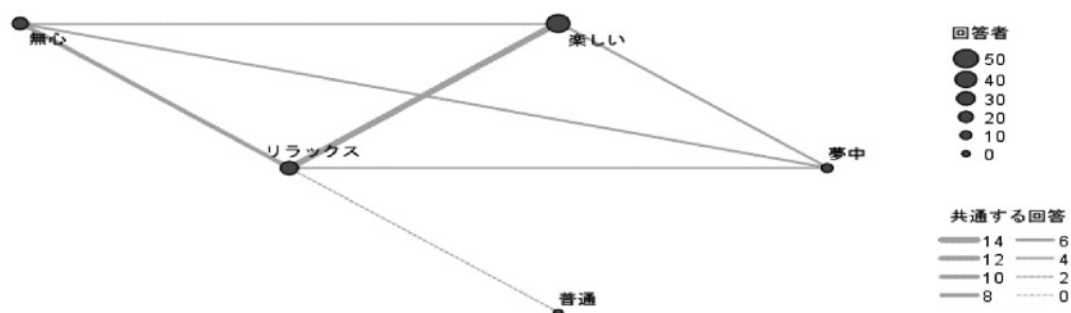


図10 落書きをしているときの気分のグリッドレイアウト

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
楽しい	<div></div>	28.6	24	28.6
達成感	<div></div>	21.4	18	21.4
変わらない	<div></div>	20.2	17	20.2
穏やか	<div></div>	19.0	16	19.0
スッキリ	<div></div>	11.9	10	11.9
罪悪感	<div></div>	9.5	8	9.5
満足	<div></div>	8.3	7	8.3
無回答	<div></div>	4.8	4	4.8
無心	<div></div>	3.6	3	3.6

図11 「落書きを終カテゴリ気分」のカテゴリ化

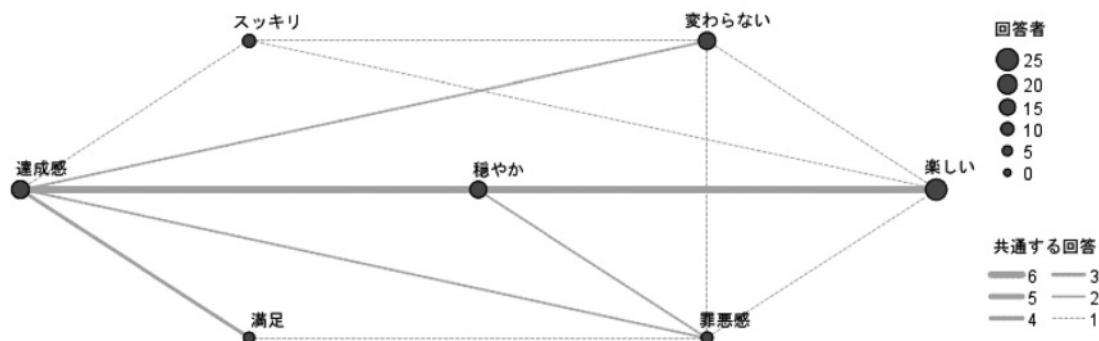


図12 落書きを終えたあとの気分に関するグリッドレイアウト

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
暇つぶし	<div></div>	59.5	50	59.5
特に意味なし	<div></div>	13.1	11	13.1
気分転換	<div></div>	9.5	8	9.5
気晴らし	<div></div>	6.0	5	6.0
無回答	<div></div>	4.8	4	4.8
気持ちの整理	<div></div>	4.8	4	4.8
眠気覚まし	<div></div>	3.6	3	3.6
遊び	<div></div>	2.4	2	2.4
趣味	<div></div>	1.2	1	1.2
単なるお絵かき	<div></div>	1.2	1	1.2
備忘録	<div></div>	1.2	1	1.2

図 13 「落書きの意味」のカテゴリ化

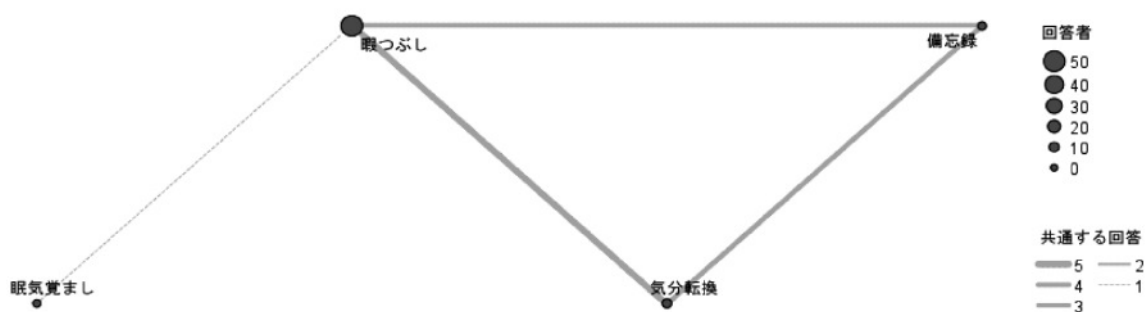


図 14 落書きの意味のグリッドレイアウト

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
高校生	<div></div>	51.9	42	50.0
中学生	<div></div>	46.9	38	45.2
小学生	<div></div>	38.3	31	36.9
大学生	<div></div>	24.7	20	23.8
幼稚園児	<div></div>	16.0	13	15.5

図 15 もっとも頻繁に行った落書き体験の時期

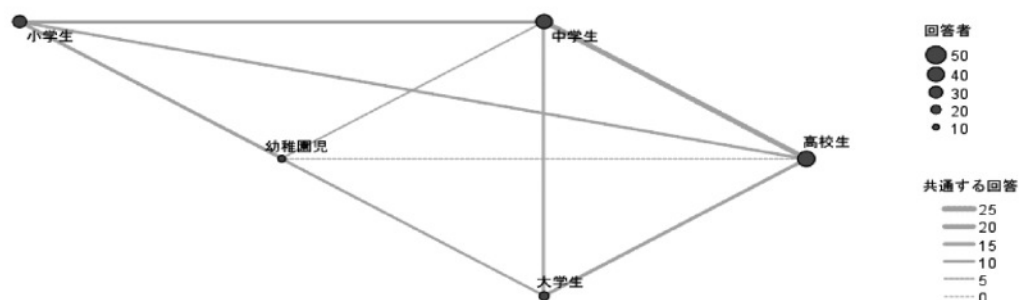


図 16 落書き体験時期の関連

う設問である。仮に違いがあると考えた場合は、「ではどのような違いがあると思いますか？」と相違点を尋ねた。

図 17 に分析結果を示した。それによると「どのような心境で描くか（例：無邪気、悪意）」「描き方」「何を描くか（例：絵、文章）」「何を伝えよう

としているか」「何に描くか（例：紙、柱）」「落書き行為」の 7 種のカテゴリが得られた。「わからない」は 3 名、子どもと大人の落書きに「相違はない」と答えたものは 21 名（全体の 25%）、「無回答」は 5 名だった。

カテゴリ	棒グラフ	選択 %	回答者	合計 %
どのような心境で描くか（例：無邪気、悪意）		42.9	36	42.9
相違はない		25.0	21	25.0
描き方		14.3	12	14.3
無回答		6.0	5	6.0
何を描くか（例：絵、文章）		3.6	3	3.6
わからない		3.6	3	3.6
何を伝えようとしているか		2.4	2	2.4
落書き行為		1.2	1	1.2
何に描くか（例：紙、柱）		1.2	1	1.2

図 17 「落書きをするときの心境」を尋ねる質問の結果

落書きはどのような心境で描かれるのか。子どもと大人とではどのような相違点があげられるか、以下に相違点をあげた対象者の素データを示す。

表 1 は 84 名から得られた「落書きをするときの子どもと大人の心境の違い」についての自由記述である。表の左側の数字は対象者番号である。

表 1 子どもと大人の落書きをするときの心境の違い

	子ども	大人
1	無邪気、純粹	悪意、イタズラ
11	素直に描くことを楽しんでいる感じ	気持ちがあられる感じ
22	悪意がない	悪意がある
31	1 つの遊び	暇つぶし
37	子どもにとってはお絵かき	大人は少し考えごとが反映されている？
39	描く場所が自由でわくわく感がある	大人の落書きは暇つぶしかなんとなく
41	描くときは一生懸命で、それしか頭にない状態	思い出して描いてみたり、暇なときに描いたりする
44	絵を描くことが本当に楽しいし、落書きが好き	本当に暇な時に描く程度のもので、何となく楽しくなる感じ
45	お絵かきを楽しんでいる	手が暇だから描く
47	意味を持つ絵を描く	単なる暇つぶしにすぎなかったりする
49	落書き自体が目的	暇つぶしが目的なのではないかと思う
51	描くものを決めずに書きなぐる	暇つぶし時間つぶしが目的で、描くものを決めて描く
52	“落書き” がしたくて描く	“暇つぶし” がしたくて、その選択肢として落書きがある
53	純粹に絵が好きで描いている	絵が好きで描くわけでもない
57	ただ楽しいから落書きをする	ストレスから逃れるためなど何か契機があって落書きをする
58	想像力を拡げて、絵の中で遊ぶ	ただ何となくつまらなくなつて描く。眠ってはいけなときなど、気を紛らわすために描く
59	思いのままにぐちゃぐちゃに描いたりする	何か形になっている。何かかわらないものはあまり描かない

60	好きなものを描く	思っていることや自分の感情を描く
61	絵が描きたくて落書きをする	手持ちぶさたのときに落書きする
62	自分の中にあるイメージを思いのままに描く	構成などを考えて上手に描こうとする
63	落書きはそれ自体が成長・発達に少なからず関わってくる	ただ暇つぶしなど、特に意味のないもののように思える
64	落書きをしようと思うまでの過程に違いがある。描くときは衝動的	描くときは、よく考えて描く
65	空想の物を描いたりする	形のあるものや実在するものを描く
68	落書きをしたくてする	落書きしかできないときに落書きをする
69	落書きというよりお絵描き	お絵かきというより落書き
72	子どもの落書きは心身の発達につながるもの	心身の発達につながるわけではない
74	ストレスがなくとも描く	ストレス解消など
75	落書きといえども真剣に描く	雑に暇つぶし目的で描く
76	周りの評価を気にせず自己満足の落書きをする	人に見せるために描く落書きが多い
77	子どもは落書きをしない	大人は落書きをする
78	落書きは一種の遊び	暇つぶし
79	何かをイメージして落書きをするが無意識に描くこともある	何かをイメージして描くこともあるが、多分に意識的
80	描いていると自然に絵になる	これを描こうと思って描く
81	描きたいときに描く	考えを整理するときに描く
82	落書きというより“絵”	手もちぶさたなときや集中力が欠けたときに描く？
84	子どもの落書きは遊び	大人は暇つぶしに描く

表2は子どもと大人間の落書きをするときの描き方の違いについての素データである。

表2 子どもと大人間の落書きにおける描き方の違い

	子ども	大人
6	落書きしていくうちに、徐々にスケールが大きくなっていく	落書きを続けても、スケールはあまり変わらない
10	絵の完成度が低い	絵の完成度が高い
12	絵のレベルが低い	絵のレベルが高い
23	クオリティが低い	クオリティが高い
26	所かまわず描いてしまう	描くところをわきまえている
33	絵にリアルさがある	絵にリアルさが出るかどうかはそのときどき
34	現実に近いものを描くのに抵抗がない	現実に近いものを描くのに抵抗がある
35	描画技術が下手	描画技術が上手い
40	ノートに大胆に描く	ノートの隅に描く
66	絵のクオリティが低い	絵のクオリティが高い
70	上手に描こうとは思わず描いていることもある	大人は落書きでもわりときれいに描く
83	描く場所をわきまえないで、どこにでも自由に描く	描く場所を決めて描く

表3に落書きとして何を描くか、子どもと大人の違いについて記した。落書きに何を描くのだろうか？

表3 落書きに何を描くかに関する子どもと大人の相違点

	子ども	大人
3	絵を描く	文章を書く
36	実物は描けるが空想したものは描けない	実物も空想したものも描ける
67	身の回りのもの、現実味の無いものを描く	今まで見てきたものを描く

表4に落書きで何を伝えようとしているかに関する子どもと大人の相違点を記した。子どもまたは大人は落書きで何を伝えようとしているのだろうか？

表4 落書きで何を伝えようとするか、子どもと大人の相違点

	子ども	大人
2	内なるものを外に伝えている	妄想や考えを目に見えるモノにして再確認する
15	落書きに目的がない	目的があって落書きする

表5に落書きをするとき、何に描くかについて、子どもと大人の相違点を示した。子どもは、大人は落書きを何に描くのだろうか？

表5 落書きはどこに描くか？

	子ども	大人
9	紙だけでなく色々な物に書く	紙に描く

表6に落書き行為についての子どもと大人の相違点を示した。

表6 子どもと大人における落書き行為の相違

	子ども	大人
14	落書きを注意されることもある	自己責任とする

10) 落書き開始時期との関連

以下に問1から問い8までの結果に関する分析結果の表を順次示す。なお図18から図25までのグラフにおいて左側の濃い棒線部分は「落書きの開始時期が中学生以上（つまり思春期以降）」、右側の最も薄い棒線部分は「落書き開始時期が幼稚園の時期（幼児期）」を意味し、中間の濃さ部分は無回答を意味している。棒線の長さは、各カテゴリの回答者を対象として、落書き開始時期の違い

による配分を意味しており、棒の長さとは一致しない点に留意されたい。一例をあげれば、「ひまなときに落書きをする」と答えた人は65名いて、それは全体の77.4%を占める。このうち55.4%（36名）の人が中学生の時期から落書きを始めた人であり、幼稚園の時期から落書きを始めたという人は43.1%（28名）、無回答者はおおよそ1.5%（1名）という意味である。

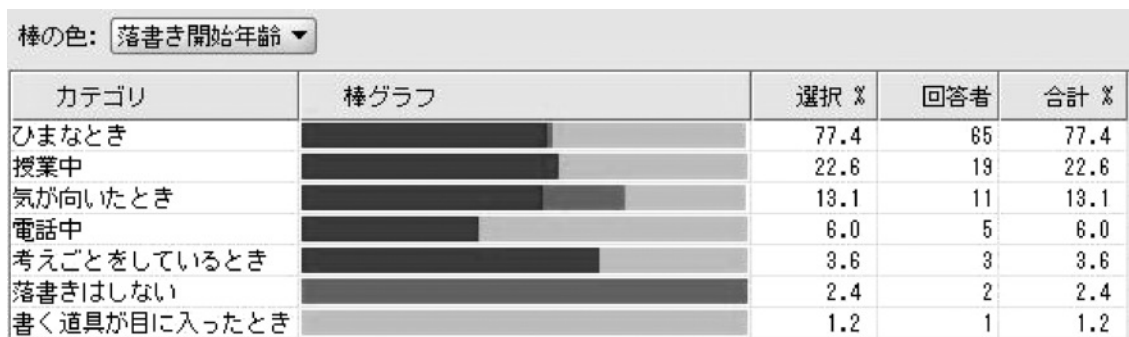


図 18 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書きをするとき」に関する相違

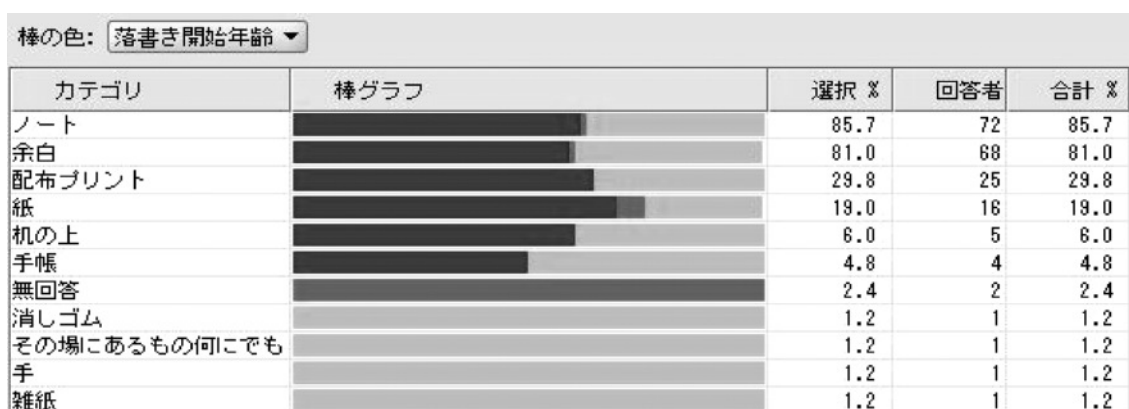


図 19 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書きをする場所」に関する相違

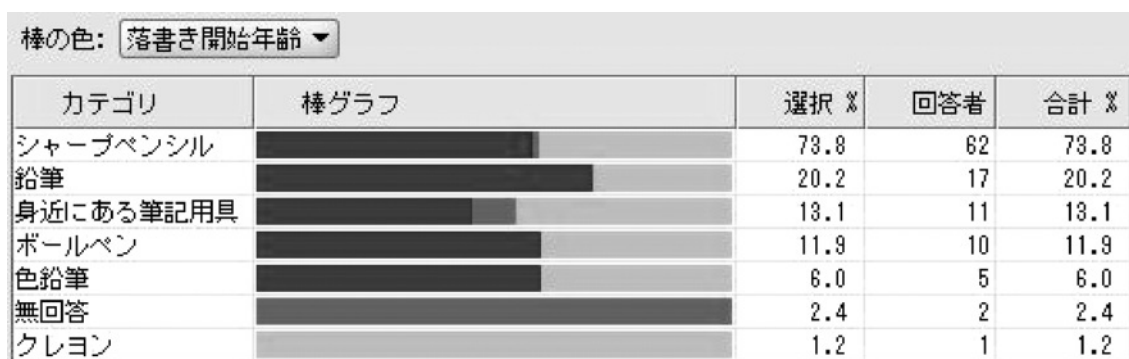


図 20 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書きの道具」に関する相違

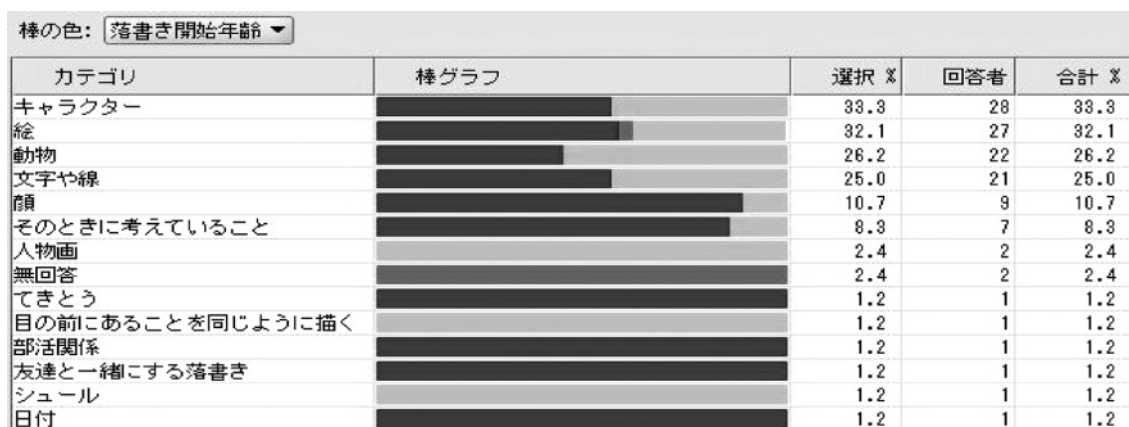


図 21 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書きの内容」に関する相違

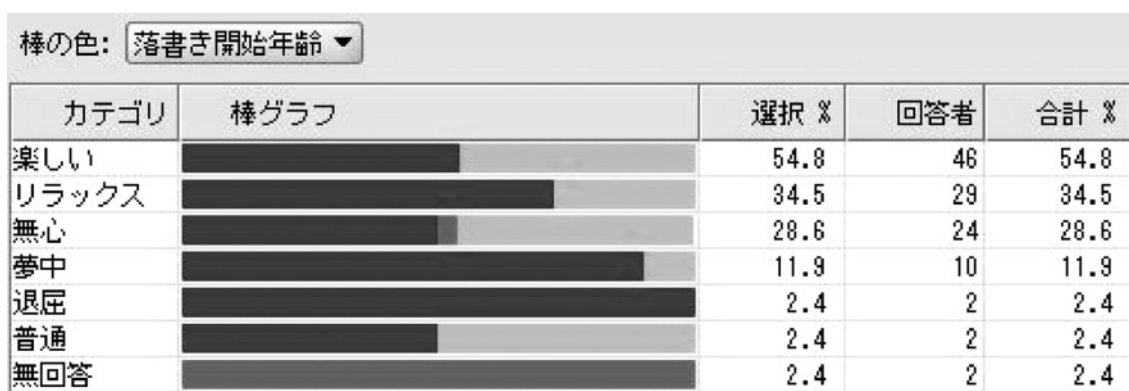


図 22 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書きをしているときの気分」に関する相違

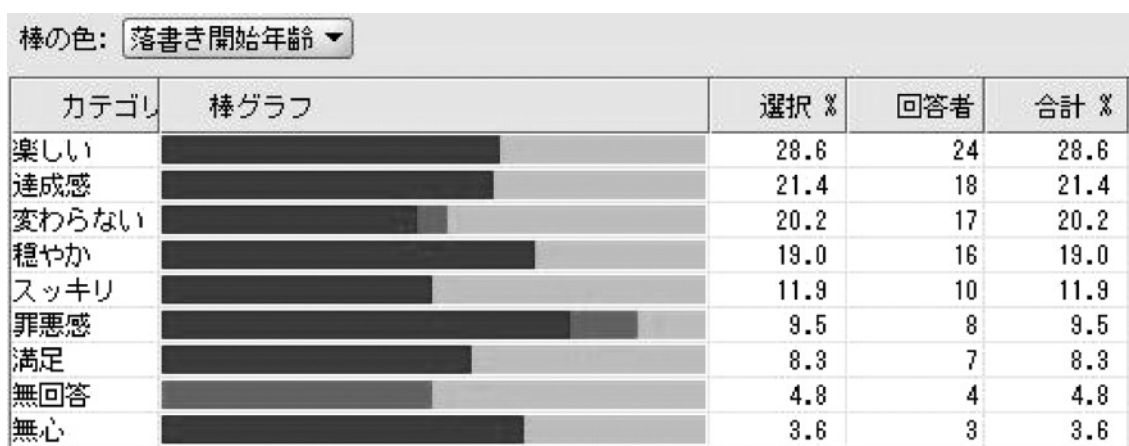


図 23 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書き後の気分」に関する相違

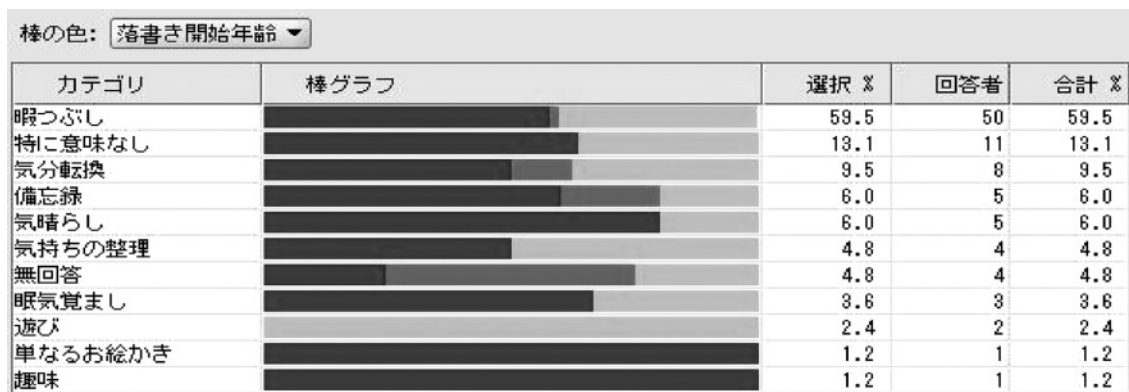


図 24 落書き開始時期が思春期以降か幼児期かによる「落書きの意味」に関する相違

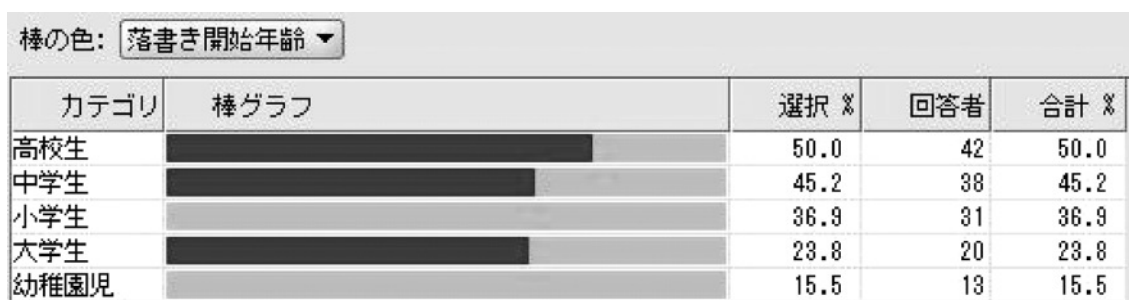


図 25 落書き開始時期

3 考察

最初に、本論文でとりあげた落書きについて整理したものを表 7 に示した。「1 はじめに」の項で紹介した代表的な落書きの中で、洞窟壁画については Reisner (1977) の記述、二条川原の揭示版

は京都市歴史資料館 (2006) または笠松ら (1994) の文献に基づき整理したもの、そして本論文における落書き分析結果の 3 つの資料において、それぞれの落書きはどのような思いで描かれたかに関する項目を追加した。

表 7 9 つの視点からの 3 つの代表的な落書きに関する推測

	洞窟壁画	二条河原の落書き	大学生の落書き
いつ	手当たり次第	政治への不満がたまった	暇なとき、気が向いたとき
どこに	人目につかない奥まった秘密で閉ざされた場所	人目につく場所	ノートの余白や手じかにある用紙
道具は	指頭画、動物の骨、石等	揭示版	シャープペンシル、鉛筆
どのような落書き	野牛との戦い	新政権の混乱振りと不安定な世相	キャラクターや動物、人の顔などの絵
どんな気分?	自分を不滅なものにしたい、自己の痕跡を残したい	世の中の不合理に対する怒りと諦め	楽しくてリラックスできる、無心になれる
どんな気分になった?	狩猟成功の高揚感	幕府政治の再興へ望み	達成感を味わえたり、楽しくなり穏やかな気持ちになれる
落書きの意味	狩猟のための魔術	世の不条理を人に伝える	暇つぶし、気分転換

自己体験	絵や文字で自己を主張	新政権に翻弄される下層公家京童の不満の表明か	落書きをよくする時期は、高校生→中学生→小学生→大学生→幼児の順
年齢による意味の相違	不明	不明	思春期以降はノート利用が増え、動機も気晴らしや無意味という応答が増加
落書きには何に対する思いが隠されているか？	生き抜くために士気を鼓舞する（例：戦闘場面や豊作に関する描画）	社会や文化に対して気になることを思い連ねる（例：不満、憤懣、怒り）	自分自身に関する思いの表現（例：自分はどうか、自分とどう向き合うか）

表7から現代の落書きは「暇なとき」に、文房具を用いて、キャラクター等の絵を描いて暇つぶしをし、同時に気分も晴れるという展開が読み取

れる。ところで、「暇つぶし」「気晴らし」「ストレス発散」には違いがあるように思われる。その相違点について表8に示した。

表8 暇つぶし、気晴らし、ストレス発散の意味の違い

	そこにあるもの	落書きの効果
暇つぶし	暇な時間空間	暇な時間空間がなくなる。するとやることが設定できる。その結果、意欲がわく。
気晴らし	気の詰まり	気が晴れる。するとスッキリ感が味わえる。
ストレス発散	溜まったストレス	ストレスが発散される。すると緊張が緩和される。

次に、落書きを『いつ』『どこに』『道具は』『どのような落書き』『どんな気分？』『どんな気分になった？』『落書きの意味』『自己体験』『年齢による意味の相違』という9つの視点から落書きの隠された心性にふれる。最初に表1を要約すれば、子どもが落書きをするときの心境つまり心理的特徴は次のようになる。

「子どもは素直に『描きたいとき』に落書きをする。ストレスがなくとも描く。そのとき、子どもの感情は、『無邪気で純粋にわくわくかつ楽しみながら、ひとつの遊びとして想像力を広げながら、一生懸命に』落書きをする。子どもは絵の中で遊ぶ。子どもにとっては、落書きをすること自体が落書きの目的と考えられる。つまり、落書きがしたくて描くのだ。子どもにとっては、落書きはお絵かきのひとつ。それゆえ『子どもは落書きをしない』といっても過言ではない。描く場所は自由で、そこに好きなものを描いたり、思いのままに描いたりする。つまり、子どもは『自分の中にあるイメージを思いのままに』描く。小さい子どもは『描くものを決めずに描きながら』、つまり『無意識に描く』し、『描いていると自然に絵になる』。求められれば『意味をもつ絵を描く』ことも

できるし、『空想のものを描く』こともできる。落書きの内容には『悪意がない』し、落書きをしようと思うまでの心理過程は『衝動的』で、落書き中はあまり『周囲の評価を気にしない』。子どもの落書きは心身の成長・発達につながる」と。

一方、大人が落書きをするときの心理的特徴は次のとおりである。

「大人の60%は『暇つぶし』を目的として落書きをする傾向にある。落書きは『暇つぶしのひとつの手段』とも考えられる。『暇つぶし』は『時間つぶし≒時間を持て余す≒何となくつまらない』と関係する。描くときは『手持ちぶさたなときや集中力が欠けたとき、またはふと思いついて描く』。そして『何となく楽しくなる感じ』をもったりする。また『イメージして描くこともあるが多分に意識的』で、『これを描こうと思って、形のあるものや実在するものを、よく考えて』描く。また『構成などを考えて、上手に描こう』とする。『何かわからないものはあまり描かない』。また『絵が好きで描くわけでもない』。大人の落書きには『何ほどか考え事が反映』される。

『考えを整理する』ために落書きをすることがある。また眠ってはいけないうきなど『気を紛らわ

す』ために描く場合もある。明確に『ストレス解消』目的で落書きをするときもある。落書きの動機はさまざまである。描く内容は『思っていること』や『自分の感情』が絡み、『気持ちがあらわれる』こともある。一方、大人は意図的に『いたずら心や、ときに悪意をもって落書きをする』こともある。この場合は『人に見せるために落書きをする』。大人の落書きは、子どものように『心身の発達につながる』わけではない。

次に表2より、子どもと大人の間での落書きにおける描き方には違いがあることがわかる。子どもは、『描画技術が未成熟で絵が下手』なのは発達的に見て自然で、その結果、『絵のクオリティまたは完成度が低くなる』のも不思議はない。大人との明確な違いは次の点にある。基本的には、『大人と比べると子どもは心理的に自由』であることから、『描く場所をわきまえない』し、『どこにでも自由に描く』。描き始めると、『徐々に落書きのスケールは大きくなっていく』こともあり、ノートに描くときは『大胆に描く』。おそらく描き手には大胆に描いているということや、スケールを大きく描いているというような意識はあまりないのではないと思われる。『上手に描こうとは思わず描いている』というのがその背景にあるのではないと思われる。よって子どもの落書きには『現実に近いものを描くのに抵抗がない』だけに、『絵にリアルさがある』。

一方、大人の落書きの仕方は子どもと逆である。「大人は描こうと思えばどうにでも描くことができる。つまり『描画技術がある』だけに、『基本的には絵のクオリティまたは完成度は高い』。また『子どもと比べると大人は心理的に不自由だ』という性質が描画に反映され、『描く場所をわきまえて描く』『ときにはノートの隅に描く』『落書きでもわりときれいに描く』『落書きを続けても、スケールはあまり変わらない』ということになる。絵のリアルさについては、絵の内容から描き手の心理的状況を察知されるのを恐れてか、一般的には『現実に近いものを描くのに抵抗がある』。ただし、心理的に病み、援助を求めているときなどは『絵にリアルさが表れるかどうかはそのときどきによる』ということになる。

表3には落書きに何を描くか？に関する素データが示されている。それによると、子どもは『実物を描くことができる』が、幸せや悩みといった

抽象的な概念を絵にすることはむずかしい。上手下手を問わなければ、子どもは『身の回りにあるものなら何でも絵にすることはできる』。一方、大人は実物のみならず、『記憶にあるものを絵にすることができる』し、『文章を綴ることができる』ことから、自己表現の手段が増える。

表4に子どもや大人は落書きで何を伝えようとしているのかについての素データを示した。それによると、「子どもは落書きを使って、他者に何を伝えようとするか」という問いの前提には、「落書きをするには、何か目的があるはずだ」という考えが背景にある。しかし「子どもの落書きには多くは目的がない」。一方、大人は「何らかの目的があって落書きをする。これは子どもと大人の間における落書きの目的に関する決定的な違いかもしれない。子どもは意識的にも無意識的にも『内なるものを外界に伝えようとする』し、大人は記憶内容を頼りとして、『見えない心に見える形(例：絵)にして、再確認する』ことができる。

表5には落書きをするとき何を描くかについて、子どもと大人の相違点が示されているが、その結果、子どもは「紙だけでなく、手、柱、机など、身近にあるものに落書きをする」が、大人は描くものをよくわきまえ、多くは「紙に落書きする」ということがわかった。

表6には落書き行為に関する子どもと大人の相違点について示されているが、その結果、落書きは落書きする場所や描画内容から道徳的問題として取り上げられることがある。道路上への落書き、人家の壁へのいたずらや中傷めいた落書き、学校内では嫌いな子どもが座っている机の隅にいたずら描きをするといった問題扱いされる落書き…これらの落書きは年齢を選ばない。

匿名であるが、書写の授業をもつ筆者は「落書きの効用—文字感覚の育成をめざして」と題するインターネットのホームページに「落書きの指導方法とその効用」として、「50分または45分授業の内、最後の10分を「落書きタイム」とする」「落書きのテーマは指示するときと、随意のときとがある。その場合、下品であったり、人の悪口であったり、縁起の悪いものでない限りにおいて随意とする」等の工夫が綴られている。落書きを授業に活かす一つの方策である(2011.1.20閲覧 <http://www.7a.biglobe.ne.jp/~kahi/text.html>)。当該ホームページの著者は落書きを「率意(そつい)

の書」とみている。書を書きたいと感じたときに何気なく筆を執って書く。手本に頼らず、自分の思うままに自由に書いていく。人間は有史以来、生きていくためにも思いつくまま何かを仕上げていく能力を身につけていたのではないと思われる。自由闊達な心性は人間というものの生来の姿ではなかったかとさえ筆者には思われる。落書きは、ときに「楽書き」になったり「落書」「落書き」になったりする。

佐藤方哉（1991）は心理学の立場から落書きの考察に取り組んだ。彼は Bijou, S. W. (1976) が示した発達理論の中で、「遊びは」を「落書きは」と置き換えてもよいのではないかと思い、なぜ人は落書きをするのか、その答えとして「剰余エネルギー説」「本能—練習説」「文化的反復説」「浄化説」「快楽説」を取り上げた。さらに機能による分類では「状況誘導型」「放大型」「マーキング型」「要求型」「記述型」「芸術型」の6種を紹介したが、いずれもスケッチの域を出ない。当該論文は「原稿の締切が過ぎたというのに、未だ構想がまとまらない。困った、困った、どうしよう…」で締め括られている。各種落書き行為の命名および分類作業のみならず、落書き行為に絡む心性について知見を深めることは、落書き研究の幅を広げ、かつ層を厚くする事につながる。

Reisner, R. (1977) は落書きについて、次のように記している。「視点や見る角度の変化から生じる対象の変化」「落書きはちょっとした見識であり、自分ばかりでなく自分に似た人たちの代弁者の心をのぞく小さな穴」「露骨な性をあらわす言葉と猥褻な絵は、いわば心で行う自慰行為」「敵意を込めたウイットは、外に向かう攻撃と相関関係をもつ (Freud, S. の知見より引用)」「ただ一つの言葉や絵であっても、その発見場所に照らして検討し、熟考と分析を加えれば、意味の層は一つにはとどまらない」と。これらの知見は、本論文が取り組んでいる心理臨床的アプローチとかなり触れ合う。落書きの心理学的分析においては、テキストそのものの分析のほかに、「何が私に落書きをさせるのか」という視点が重要である。今後、落書きを押し上げる心性とその心性（思い）の“形”、そして落書きの構成要素等について研究を深めたい。

文献

- 朝日新聞 (2009.9.27 付)：落書き「誰が」対処は適切？ 認めた女子中学生、窓乗り越えケガ
朝日新聞 (2008.11.29 付)：もっと知りたい！ 電車落書き国際集団とは
- Bailey, J. (2008): Why psychology? Graffiti written above the toilet roll holder in a toilet of a leading British university read, 'Sociology degrees — please take one.' Psychology is often similarly misunderstood. What is it really like? Psychology Review, 14.1: p.18(2).
- Bijou, S. W. (1976): Child development: The basic stage of early childhood. Prentice-Hall.
- Gardner, H. (1980) Artful Scribbles: The Significance of Children's Drawings. New York: Basic Books.
(星三和子訳 1996 子どもの描画 — なぐり描きから芸術まで 誠信書房)
- 笠松宏至, 百瀬今朝雄, 佐藤進一編(1994)：中世政治社会思想下 (日本思想大系) 岩波書店
- 小山充道(2008)：なぐり描き法(小山充道編著 『必携臨床心理アセスメント』所収 p.358-363) 金剛出版
- 京都市歴史資料館 (2006)：二条河原落書 ver.1.03
松枝到(1991)：「落書き」を定義する 言語, 20-9(通巻 237), p.20-5.
- Naumberg, M. (1966) Dynamically Oriented Art Therapy. Grune & Stratton.
(中井久夫監訳・内藤あかね訳 1995 力動指向的芸術療法 金剛出版 p.31-32, 120, 236)
- 佐藤方哉 (1991)：「落書き」を心理学的に考える言語, 20-9 (通巻 237), p.20-25.
- Reisner, R. (1977): Graffiti: Two thousand years of wall writing. Max Gartenberg.
(鈴木重吉・片山厚訳 1977 落書きの世界時事通信社)
- 李家正文(1952)：便所らくがき藝術史 — 黄金藝術の誕生とその展開 人間探求, 第 30 号 10 月号, p.22-41.
- Winnicott, C., Shepherd, R. & Davis, M. (Edi.) Psycho-analytic Explorations by Winnicott, D. W. (1987)
(牛島定信監訳；倉ひろ子訳 1998 スクイグル・ゲーム「ウィニコット著作集第 8 巻 精神分析的探究 3 子どもと青年期の治療相談所」所収 岩崎学術出版社 p.71-92.
- 吉原健一郎 (1999)：落書 (RAKUSHO) というメディア — 江戸民衆の怒りとユーモア 教育出版